

「屋根をはがす信仰」

マルコ2：1～12

木村一充牧師

この朝与えられた聖書の箇所は、マルコによる福音書2章1節以下です。礼拝のあの教会学校の分級で学ぶ箇所とも一致していますので、参考にしていただくと幸いです。主イエスはガリラヤの各地方を巡りながら、神の国の福音を語られる巡回伝道をなさっていました。そのような中で、イエスがふたたびカファルナウムに戻られ、家におられたときの話がここに記されています。このカファルナウムの家は、もしかしたらイエスの第一の弟子となったシモン・ペトロの家であったかもしれません。すぐ前の1章29節、右側のページをみるとイエスがシモンの家を訪れ、熱を出して苦しむシモンのしゅうとめを癒したという記事があります。シモンのしゅうとめは元気になり、一同をもてなしたとあります。その噂を聞いた人々が、病人や悪霊につかれた人をイエスのもとに連れてきました。町中の人がシモンの家にやってきました。それ以来、イエスはシモンの家を宿としてそこに泊まり、カファルナウムでの伝道活動をしていましたのではないかと思われます。1節に「家におられることが知れ渡り、」とありますが、誰の家とは書かれていません。原文のニュアンスは「在宅であることが知れ渡り」という意味になります。カファルナウムに入るときは、このシモンの家がイエスの宿となった可能性が高いのです。

何日かぶりにイエスがこの町に帰ってきてくださった、いま漁師のシモンの家におられるという噂が広がり、大勢の人がこの家を訪れました。戸口のあたりまで人でいっぱいとなり、中に入れないほどの群衆がそこに集まっています。2節に「み言葉を語る」とある「み言葉」には、原文には英語でいう定冠詞が付いています。「あの言葉」というくらいの意味です。おそらく、主イエスはガリラヤの各地を巡る際は、いつも次の言葉を語っておられたのではないでしょうか。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」そのように行く先々で語っておられたのではないでしょうか。すると、その時です。そこに少し遅れて4人の男が中風の人を運んできました。たたみ一畳ほどの大きさだったのでしょうか。担架に担がれるような格好で、4隅を4人の人に支えられながらやってきた。ところが、家の中は人で一杯で、入る隙間もありません。そこで、4人は屋根の上に上がり、その屋根に穴を開けて、そこから病人をつり下ろすかたちでイエスに面会させたというのです。当時のパレスチナの民家は、屋根に上るために外階段があるのが普通でした。屋根はフラットで、しばしば休息の場所、または祈りの場所として用いられました（使徒言行録10：9）。その屋根は、梁と梁のあいだに木の枝を敷き詰め、そこに粘土をぬって固めた屋根でした。柱には木または石を使い、梁は木を使って家を建てました。ですから、この屋根をはがすという作業も、わが国の木造家屋のように大変な作業ではありませんでした。泥のつめものを取り除き、穴を開けるだけでよかったです。ただし、1階の広間でみ言葉を語っている途中の出来事であります。説教の途中で、何やら上方で物音がする。やがて、ばらばらと泥が落ちてきて、天上を見上げると空が見えて、そこから人が下に吊り下げられてくる、というような次第でイエスは驚かれた。礼拝は中断を余儀なくされたことでしょう。5節に「イエスは、その人たちの信仰を見て」とあります。信仰は目に見えないのですが、それを見たといっています。屋根をはがすほどの予想外の行動、驚くほどの熱意をもって、どうしてもこの病人をイエスに面会させたいと4人は思いました。もしかしたら、彼らは叫んだかもしれません「その人を助けてやってください。病気を治してやってください。お願いします！」と。イエスは、その人たちの信仰を見ました。その人たちとは誰か。担架の4隅を支えた4人、さらに中風の人本人が含まれるでしょう。しかし、それだけではありません。それに加えて、屋根を壊して穴を開けることを許可したこの家の主人も、そこに含まれると私は思います。その人の癒しのために屋根が壊れても構わないと思ったのです。

かつて、福岡の西南学院大学の神学部で学んだ時、最初の年に私は佐賀の教会の奉仕神学生として教会生活を過ごしました。その教会は、1970年ころの教会闘争と呼ばれる時代に、牧師と信徒との間にさまざまな意見の対立が生じ、教会員が礼拝に来なくなってしまった時代があったといいます。私が入学した年は1981年でしたが、その教会の再建のために代行牧師をつとめたのが神学部の中村和夫先生でした。その中村和夫先生の車に乗って、毎週日曜日、佐賀までの道を通ったのです。散り散りになった信徒の家に電話をかけ、足を運んで訪問し、教会の再建のために、昔のように礼拝に出席してほしいと頭を下げてまわった結果、4人の壮年の信徒が教会に戻って

くれたといいます。その4人が、中村先生のもとで教会を再建しよう決意した際に、互いに言い交した約束があったといいます。それが、本日のマルコ福音書の物語でした。あの中風の人を4人の男が、天に穴を開け4隅からつり下ろしてイエスに近づけて癒してもらったように、私たちもこの教会を4隅から支える一人になろうと誓ったといいます。40年以上たった今で忘れられない言葉です。栗ヶ沢教会の皆さま、どうかこの教会を4隅から支える4人の中の一人になってください。教会は牧師のものではありません。特定の人のものでもありません。一人一人が主役であり、全員で力を合わせて教会を立て上げるのです。教会はキリストの体と言われます。体の一部、たとえば歯が一本欠けても、足の爪が一枚はがれても、その人にとっては一大事であります。教会も同じです。一人一人にその人独自の個性と賜物があるので、それが教会全体にとって宝なのです。

しかし、本日の物語の中心をなすメッセージは、この出来を見て語られたイエスの次のお言葉にあります。何とおっしゃったか。5節です。「子よ、あなたの罪は赦される」ここで、この福音書の中で初めて「罪」という言葉が出てきます。その意味はとても深いです。4人の男は病の癒しを期待しました。「子よ、あなたの病は癒される」とイエスが言われると思っていたのです。しかし、イエスはこの病人に罪の赦しを宣言します。なぜでしょうか。ちなみに、ここで「子よ」と呼び掛けられたのは、当時のラビたちは自分の弟子となることを認めた人に向かって「子よ」と呼ぶ習慣があったことによります。イエスはこの病人を自分の弟子として、受け入れておられたのです。この罪の赦しの宣言が、突如として驚きのうちに発せられます。それはイエスがこの病人を特別に罪深い人間と見ていたからではありません。さらに、人間の病や苦しみはその人の罪に対する報いであると、イエスがユダヤの古くからの見方に従って考えていたわけでもありません。ここでの罪は、もっと広い意味で語られています。すなわち、イエスはこの病人の本当の意味での「救い」を問題にしておられるのです。

水野源三と言う人がおりました。1984年にお亡くなりになりましたが、この人は「まばたきの詩人」として知られている人です。脳性麻痺のために、手で書くことも、口で語ることも出来ない状態になったこの人ですが、キリストの愛に触れ、主の憐れみに生かされ続けて感謝の歌を歌い続けたことを、私たちは知っています。その詩人に、次の歌があります。脳性麻痺になって三十三年を迎えた時の歌です。「三十三年前に脳性麻痺になった時は神様を恨みました。それが、キリストの愛に触れるためだと知り、感謝と喜びに変わりました」この詩人は、決して悩みや悲しみ、病気の支配のもとにはいません。そうではなく、キリストの支配のもとに入れられ、今や感謝と喜びに生きています。日夜襲う苦しみや痛みであっても、キリストの愛から私を引き離すことはできないと、この人は歌うのです。

使徒パウロはコリントの信徒への手紙二の12章で、次のように書いています「それで、そのために思い上ることがのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは…サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせるようにわたしは三度主に願いました。すると、主は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ、十分に發揮されるのだ」この肉体のとげは何だったのか、いろいろな説があります。目の病気か、てんかんのような発作症状だったのか、それは、人から蔑まれるほどの弱点だったようです。いわば、福音伝道の妨げになるような大きな障害でした。しかし、それを去らせてくださいと祈った時、パウロは主の言葉を聞いたのです。それが「わたしの恵みは、あなたに十分である」「わが恵み、汝に足れり」という主の言葉がありました。

そのような救いがこの中風の人にも到来しなければならない。すなわち、ここでいう「罪の赦し」とは人間の肉体も魂も、神の前に十全なかたちで整えられ、健やかにされ、滅びることから解き放たれることです。私たちが神のものとされ、神とともに生きるようになる。それがイエスが説く救いです。肉体の癒しは、その罪の赦し、すなわち救いの一部でしかありません。言い換えれば、たとえ肉体が癒されず、肉体のとげがあっても、キリストの愛の中に生きるなら、その人は救われている。恵みが勝利しているのです。それゆえ、「救いは癒しにまさる」のです。

私たちは、神の言葉によって支えられ、神の言葉によって生きるものです。どのような人生を歩もうと、「あなたの言葉は、わたしの道の光。わたしの歩みを照らす灯」という今日の詩編の言葉をたよりに、先の見えない今の時代において、途方に暮れて立ち尽くすことなく、主の光に導かれて歩みたいと思うのであります。

お祈りいたします。